

密教について

1、はじめに

私は、「法華経の靈性について」という法華経の解説をした際に、次のように述べた。すなわち、

『 智顛(538～597)は、釈迦の人生を五つの時期に分けて、重要な仏典を整理した。①華嚴経(けごんきょう)、②阿含経(あごんきょう)、③方等経(ほうどうきょう)、④般若経(はんにゃきょう)、⑤法華経(ほけきょう)、この五つの順に釈迦はそれぞれ異なる教えを説いたと智顛は考えた。

法華経は、釈迦の人生最後の説教であり、それまでの説教を踏まえてそれらを包括するというかそれらを超える教えを説いたものである。すなわち、法華経は、すでに縷々説明してきたように、釈迦がブツダとして永遠の過去から未来に生まれ変わり出現して、衆生を救うと宣言する。法華経の教えによって全ての衆生(しゅうじょう。一般の人々)が仏性に目覚め、それぞれがブツダになり、宇宙の真理を悟ることができる。法華経以前の教えは、それぞれブツダになるための方便であり、「生き物の円錐宇宙」における菩薩曲線の途中段階で守るべき教えでしかない。しかし、それでは自分も確かにブツダになれるという希望は得られにくいし、衆生(しゅうじょう。一般の人々)を救うことはできない。自分も確かにブツダになれるという希望を得るとともに衆生(しゅうじょう。一般の人々)を救うためには、法華経が必要だ。菩薩も声聞も一般の人々も、人生の苦から救われるためには法華経の靈性と多少でも触れ合うことが必要なのである。そのために釈迦は法華経という人生締めくくりの説教を行ったのである。』・・・と。

しかし、空海は774～835年の人であり、智顛は空海の密教を知らないから、もしそれを知っていたら、仏教の中でやはり法華経を最高の仏典と位置づけたであろうか？ 結論から言えば、密教も菩薩や声聞がブツダを目指しての修行を重ねていく上での「方便」でしかないので、密教が華嚴経、阿含経、方等経、般若経を超えた教えであるとしても、密教は宇宙の真理を教えたものではないので、私は、やはり法華経が仏教の最高の経典であるとした智顛の判断は間違っていなかったと考える。それでは以下において、空海の密教について解説を試みたい。

2、空海の密教（東密）

密教については、阿部龍樹の「空海の詩」（2002年6月、春秋社）という本が比較的良く書けていると思うので、まずはその紹介をしておきたい。阿部龍樹は密教について、次のように述べている。すなわち、

『 祈るとき必死に手を合わせるのは洋の東西でまったく変わらない。手を合わせることは心と分かれた自己を一つにし、彼方の世界や宇宙、神仏に結び開こうとすると自然と手が合わされる。この心の働きをシステム化したのが瞑想法であり瑜伽（ゆが）でありヨガだ。静かに座り、足を組み、目を半眼にする。身体を閉じ結ぶことで、心は逆に開かれ彼方の宇宙と結ばれている。ここには身体より精神、心の優位性が見られる。しかし空海は身体と成仏は即の関係だと言う。心は身体より上に位置し、心と精神が肉体を支配している、と普通には考えられる。その精神、心が悟りを開き仏になるから即心成仏と考えられる。しかし空海は即身に成仏するという。空海はなぜ身体と悟りが即と考えたのか。私たちは普通、身体と欲望が即の関係にあると考える。さまざまな欲望や欲求は人が身体を備えるからだ。それは生命の自然な摂理だった。食べること、眠ること、性の営み、そして快楽。性の営みと快楽は超えられる。あるいは超えやすい。しかし食べることと眠ることは避けることも超えることもできない。特に食べることは人間が負うもっとも大きく深い業かもしれない。そしてそうした他の生命を糧に生きるという業を持つ身体が成仏できると空海は説いた。業を成仏へ変換できると。』

『 では身体と成仏が即であり、身体と欲望が即であれば成仏と欲望も即なのか。空海はそうだと答える。仏教ではさまざまな欲望を煩惱という。一般には108の煩惱があるという。身体、言語、心に伴って煩惱がある。密教では、「煩惱即菩提」と言い切る。空海は性の難しさも十分に知りながらそれを聖、成仏と即であり、即である以上、性を聖へ変換できると説いた。人間の持つ業をいかにして悟りに変換するのか。その変換方法を三密瑜伽行（さんみつゆがぎょう）という。また真言秘密瑜伽（しんごんひみつゆが）ともいう。』

『 空海は驚くほどの早さで多くのものを学び吸収していった。儒教も道鏡もそして仏教のあらゆる経典、さらにはさまざまな学問も。（中略）仏教が釈迦から始まり大乘菩薩道に進み、さらに密教に到達する。密教は仏教の中での完成点、到達点であった。しかし空海はさらにその臨界点を超えようとしていた。仏教の中だけで完成させても、他の思想宗教を含まなければ真の完成にはならない。アジアには他の宗教や思想を取り込むという許容性があった。空海は他の思想にも深い興味と正しい理解を持っていた。唐の長安では世界中の宗教思想に触れていた。そのすべてを矛盾無く包み込む巨大な思想の大マンダラを見ていた。』・・・と。

私たちは、煩惱によって三つの業（ごう）を持っている。身業（しんごう）とは身体の上に現れる偷盗（ちゅうとう）・邪淫（じゃいん）・殺生（せっしょう）などであり、口業（くごう）とは口が発する言葉による妄語（もうご）・両舌（りょうぜつ）・悪口（あつく）・綺語（きご）などであり、意業（いごう）とは精神のはたらきで起こる貪欲（とんよく）・瞋恚（しんい）・邪見（じゃけん）であるが、この三つの業を三業という。これに対して、身体、言葉、精神のいずれにおいても、業とは正反対の聖なる不思議な世界がある。これを三つの秘密の世界という意味で「三密」というが、ブツダの活動を身体、言葉、精神ごとに言い表したものである。その世界に近づくために空海は三密瑜伽行（さんみつゆがぎょう）という修行（しゅぎょう）の方法を考えた。すなわち、修行者が、手にブツダの身振りを象徴する印契（いんけい）を結び（身密）、口にブツダの発する言葉の象徴としての真言（しんごん）を唱え（口密）、心にブツダの姿を思い描いて（心密）、ただひたすら無心に修行する、それが三密瑜伽行（さんみつゆがぎょう）という修行（しゅぎょう）である。ブツダの活動も私たちの活動も、身体的活動、言葉的活動、精神的活動という三つの活動に分類してそのあり方を考えたという空海の考えはそれまででない誠に奥の深い考えであると思う。

阿部龍樹はその著「空海の詩」（2002年6月、春秋社）の中で、空海の業績について次のように述べている。すなわち、

『身体的な表現は建築によって完成させた。高野山の大塔にその究極を見ることができ。言語的な表現は東寺講堂の内部荘厳、立体曼荼羅であり、書の表現であり、仮名の発生と和歌、陀羅尼論へと多彩な広がりを見せる。精神的な表現は「萬燈萬華法要」と「後七日御修法」という法要つまり法の要（かなめ）として完成され、その要から空海が未来へと大きく開かれていった。』

『「萬燈萬華法要」が生きとし生けるすべての衆生の救済を願う法要であるのに対し、「後七日御修法」は国家の平安を祈る法要だ。「後七日御修法」は今は東寺の灌頂堂で毎年正月8日から一週間勤められる。真言宗の最高位の長者を法要の大導師に迎え、長者とともに真言宗の長老のみによって勤められる。期間中は僧侶でも中に入ることは許されない。しかし七日間の法要が成満すると、誰でもその道場は参拝できる。その道場はまさに密教の総合の凄さを見せる。幔幕で結界された外側に声明を唱える僧侶の席があり、帳の向こうには大曼荼羅が飾られている。一年ごとに東西に金剛界と胎藏界の曼荼羅が飾られる。その前には大壇が荘厳される。そして北側には五大尊像が飾られ西方には息災の護摩壇。西北隅に増益の護摩壇。東方寄りに聖天壇を構え東に十二天を祀る。成満直後の道場は護摩の炎の煙が残り、七日間の行法の凄さが分かる。この「萬燈萬華法要」も「後七日御修法」も空海最晩年に始められた。』・・・と。

密教は、釈迦が開いた仏教と、インドの土着の宗教や呪術などが合流したところで生まれた、仏教史全体の中で比較的新しい時代の宗教だ。しかし、密教は釈迦をも包含した、より根源的・絶対的なブツダが存在すると考えた。それが大日如来というブツダだ。大日如来は真理そのものを象徴するブツダだが、実際の世界で働く時は、さまざまな姿をとる。諸明王や諸天も、みな大日如来の化身したものなのだ。そのルーツは仏教以前のバラモン教にあり、神々を祭って叙災や招福を祈る際に、マントラという呪文を唱えた。その神聖な言葉には、神々と世界を動かす力があると信じられた。このマントラが仏教に取り込まれたものが真言（しんごん）と陀羅尼（だらに）である。一般に、短い呪文を真言、長い呪文を陀羅尼と呼ぶ。密教が真言宗と呼ばれるのは、真言こそが密教の教えと修行の中核になっているからである。

仏教の究極の目的はただ一つ、釈迦のようにブツダになる（成仏する）ことだ。そのために、仏教では膨大な数の戒律や行うべき修行がある。けれども、そうやって全身全霊をささげて修行しても、釈迦のようなブツダになるまでには輪廻転生を重ねていかなければならない。釈迦だって前世は菩薩だったのだから、菩薩曲線の最終点にブツダがあるとしてもそれは容易なことではない。しかし、密教では、現世のこの肉体のままブツダになれると説いた。これが「即身成仏」である。

大乘仏教は、すべての存在には本来的にブツダの性質（仏性ぶっしょう）が備わっているとしたが、その仏性を開花するにはやはり無限の時間を要するという。ところが大乘仏教の究極の形態として登場した密教は、密教に帰依し、三密瑜伽行（さんみつゆがぎょう）を修行すれば、現世におけるこの身のまま、ブツダになれると説いたのである。三密瑜伽行（さんみつゆがぎょう）、すなわち、手に印を結び、口に真言（しんごん）を唱え、心にブツダの姿を描いてブツダの境地と合わせる努力をすれば、現世におけるこの身のまま、ブツダになれると説いたのである。これは画期的なことである。具体的な修行の方法、すなわちブツダを目指す便法としては、釈迦の教える華嚴経、阿含経、方等経、般若経を確かに超えていると思う。その点では、空海は釈迦を超えている。

空海は、釈迦がそうしたように弟子に自分を信じろとはそれほどは力説しなかった。釈迦は弟子に対し修業によって誰でもブツダになれるし、ブツダになれば私のように宇宙の真理を悟ることができる。だから、私を信じてブツダを目指せと、法華経の説法を行なった。しかし、空海は、そういう説法を行なっていない。空海は、ただひたすら即身成仏を教え、そのための修業の仕方を教えたのである。しかし、空海は、法華経のような説法を行なわなかったけれど、宇宙の真理を悟っていなかった訳ではない。

「五大皆響き有り、十界に言語を具す、六塵悉く文字なり、法身は是れ実相なり」。この言葉は空海の「声字実相義(しょうじじっそうぎ)」の中の言葉である。

空海によれば、世界の根源あるいは根底には「大日如来」がある。大日如来とは、大いなる波動、無色透明の純粋な波動である。この大いなる波動が、渦を巻き、螺旋を描きながら(マンダラに描かれているように)、多種多様に生成変化したのが、この世界である。大

日如来は波動、空海はそれを真言と呼んでいるが、そういうものを通じてたえず生きとし生けるものに働きかけている。それを「法身説法(ほっしんせつぽう)」という。森羅万象すべてのものが大日如来の恩恵を受けて存在しているのだ。空海は、そういう宇宙の真理を理解していた。そして、そういう宇宙の真理を伝えるために「法身説法(ほっしんせつぽう)」を行ったのであるが、そういう宇宙の真理は、本来、理屈では理解できないものである。だから、理屈はともかく、自分の言うことを信じさせるために、釈迦が法華経の説法の時に行なったように、神秘的な体験を弟子たちにさせ、深い感動を引き起こすように仕向けなければならなかったのではないか、私はそのように考えている。その点で、私は、空海より釈迦が優れていたと考えている。しかし、菩薩や声聞に対する修業の方法、つまり便法としての説法については、釈迦より空海の方が優れていたと思う。そのことと、先ほど申し上げた空海が宇宙の真理を悟っていたという点から、空海も釈迦と同様にブツダであったのは間違いないと思う。空海はブツダだ！

もちろん、空海は、「宇宙の真理」そのものを教えてはいない。しかし、釈迦は、ブツダにならない限り「宇宙の真理」そのものを悟ることはできないが、宇宙の靈性に触れることはできるとして弟子たちに法華経を説教した。その点では、釈迦は空海より優れた人であると思う。すなわち、私は、宇宙の靈性に触れ、いい知れぬ感動を覚えることのできる仏典・法華経がやはり仏教の最高の経典であると考えている。かかる観点からは、法華経を基本教典とする天台宗の密教（台密）が真言宗の密教（東密）を超えていると思われるが、その点については、以下において説明することとしたい。

3、天台宗の密教（台密）

私は、冒頭（1「はじめに」）で、『空海は、「宇宙の真理」そのものを教えてはいないので、私は、宇宙の靈性に触れ、いい知れぬ感動を覚えることのできる仏典・法華経がやはり仏教の最高の経典であると考えている。その点では、法華経を基本教典とする天台宗の密教（台密）が真言宗の密教（東密）を超えている』・・・と申し上げた。以下そのことを詳しくご説明したいと思う。

空海は、802年、桓武天皇より入唐求法（にっとうぐほう）の還学生（げんがくしょう、短期留学生）に選ばれる。そして、804年、通訳に門弟の義真を連れ、空海とおなじく九州を出発。明州に到着。天台山に登り、湛然の弟子の道邃と行満（ぎょうまん）について天台教学を学んだ。

当時、中国では密教が仏教の新潮流だった。以前から密教に着目していた最澄は、龍興寺（りゅうこうじ）の順曉（じゅんぎょう）から両部灌頂（りょうぶかんじょう）を受け、密教經典を与えられた。

一方、空海は、密教を本格的に学び、青龍寺（しょうりゅうじ）で中国密教界最大の僧・恵果（けいか）から密教の奥義を伝授された。そして、最澄が得た密教經典をはるかに凌駕する、膨大かつ重要な密教經典を日本に持ち帰ったのである。

最澄の密教の研究は不十分であった。そのため、最澄は、弟子とともに空海から両部灌頂（りょうぶかんじょう）を受け、密教經典を借覽（しゃくらん）する。しかし、はじめは良好な関係の中で密教經典の借覽（しゃくらん）が進んだのであったが、遂には、二人の基本的な考えの違いから、密教經典の借覽（しゃくらん）ができなくなる。最澄が法華經と真言密教を並列的に矛盾なく広めようとしていたのに対し、空海は真言密教を最高の教えとしていたので、そもそも二人は互いに尊敬し合っていたとしても、そもそも立場が違っていたのである。空海が最終的に密教經典の借覽（しゃくらん）を断ったとしても宜（むべ）なるものがあつたと思う。

最澄門下の俊英であった円仁（794～864年）は、44歳で入唐、約10年間滞在して密教を学んだ。空海の真言密教に対抗すべく、天台密教の大成に腐心したが、その最大の成果は、空海が唐で密教を学んだ青龍寺（しょうりゅうじ）で、当時の高僧・義真（ぎしん）から「蘇悉地法（そしつじほう）」を伝授されたことである。台蜜（たいみつ）では、「蘇悉地法（そしつじほう）」がきわめて重要とされているが、それは円仁が金胎兩部（こんたいりょうぶ）を統合するものとして、この「蘇悉地法（そしつじほう）」を位置づけたためである。

円仁とならび称される台蜜の巨頭・円珍（814～891年）は、37歳のとき、しばしば夢に比叡山の鎮守神である山王明神が現れ、入唐求法を強く勧められ、その旨を文徳天皇に上表したところ、入唐を勅許された。入唐後、開元寺で梵字などを習得した後、天台山の諸寺を巡礼、さらに青龍寺（しょうりゅうじ）で、当時の中国密教の第一人者・法全（はっせん）から金胎兩部（こんたいりょうぶ）と阿闍梨位（あじゃりい）の灌頂（かんじょう）を受け、真言密教を詳しく伝授された。特に、法全（はっせん）は、「金剛頂經（こんごうちょうじょうきょう）」に基づく曼荼羅・五部心觀（ごぶしんかん）を、円珍に授けた。その後、円珍は、大興禪寺（たいこうぜんじ）で、インド僧の大学者・知恵輪三蔵（ちえりんさんぞう）からも密教の奥義を伝授された。在唐6年を経て、円珍は約1000巻もの經典を携えて帰朝した。円珍については、日本に居ながら唐の青龍寺（しょうりゅうじ）の火災を靈視、比叡山から香水（こうずい）をまいて加持すると、さしもの火災も鎮火したという話など、円珍の法力を示す話が数多く伝えられている。

さらに、比叡山には、安然（あんねん）という比類なき大学匠がでて、天台宗の密教化は完成の域に達していく。安念は、空海の即身成仏義を深く勉強して、当時としては、空海の弟子と言えども安念にかなう者はいなかったようだ。当時、安念は密教の第一人者であったのである。したがって、天台宗の密教は、安念のお陰で、完成の域に達したと考えられている。しかし、密教を重んじるあまり法華経を軽視したため、比叡山内部から反感を買い、晩年は不遇であった様である。貧乏神としての逸話もいくつか残されているが、彼の实生活も貧乏そのものであったようだ。

したがって、安念は天台宗の本流から外れた特別の人で、彼があまりにも密教を持ち上げたために、天台宗の伝統、法華経信仰の影が薄くなったのである。この状態は十八代慈恵（元三）大師・良源まで続く事になる。

良源（912～985年）は、天台本覚思想の完成者であり長く座主を務め、三塔十六谷を完成し延暦寺を興隆させる。また密教に固執していた比叡山に円教を復活し、本来の覚性、即ち総ての人間に本来殻持つ覚の智慧、言い換えれば「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしつかいじょうぶつ）」をいう「天台本覚論」を著した。

これが浄土系、禅宗、日蓮宗などの鎌倉仏教発祥の触媒になるなど、天台宗は誠に懐が深い宗派へと進化した。

法華信仰を取り入れた文学や美術の分野に貢献したが、反面、教学的には脆弱化する。天台宗の伝統、法華経信仰の教学に磨きをかけ、最澄や智顛の教えを真正面から受け継いだのは、日蓮である。

ちなみに、天台のいう本覚論とは、すべての人は仏性を持ち悟りの心を持つ事をいう。これを深く勉強するには、日蓮を勉強する必要がある。私は、日蓮もブツダだったと思う。法華経の哲学を作るには、日蓮の言動について哲学的な思考を重ねなければならないと考える次第である。